

『享和三年 小西郷村庄屋 市左衛門日記』について

令和7年11月11日

岐阜県歴史資料館 萩島一美

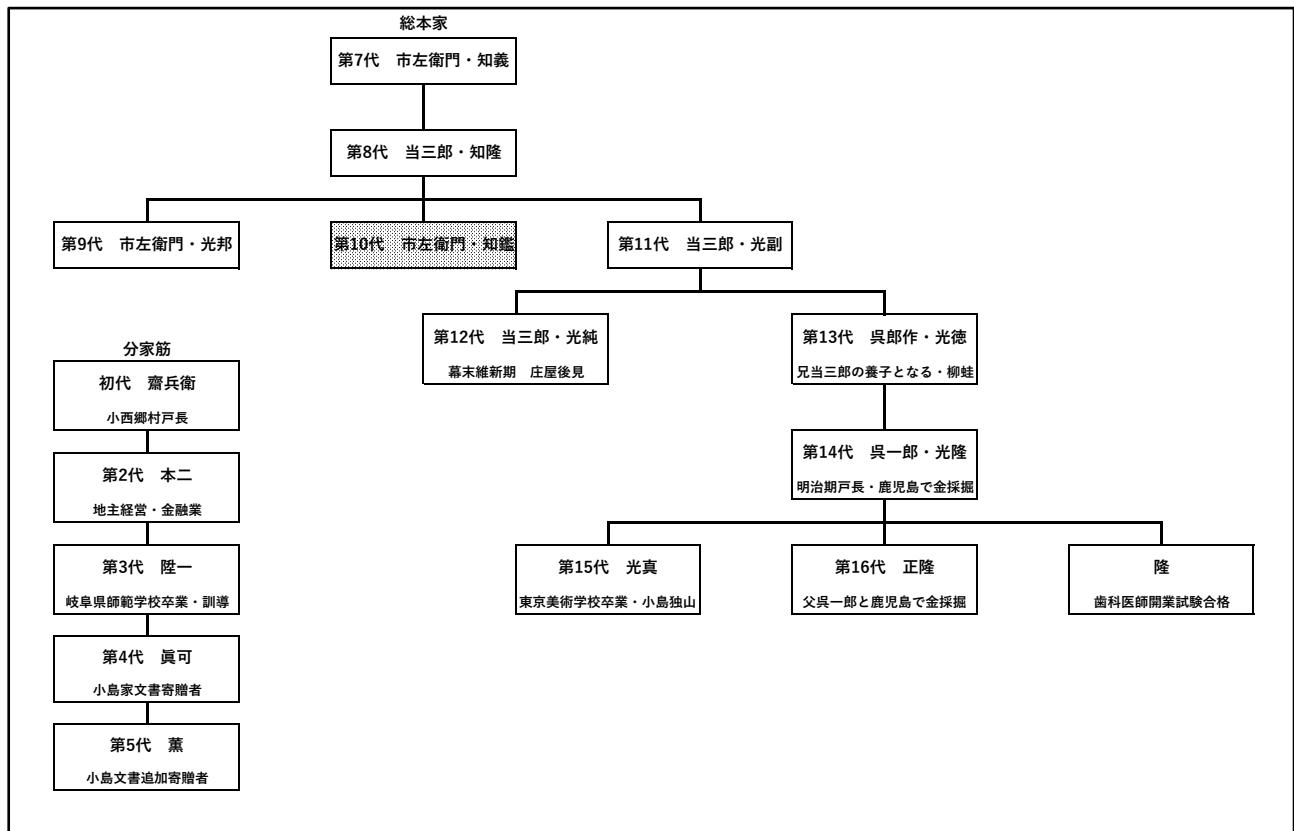
1 小島家について

小島眞可家文書の庄屋日記をテキストとする古文書講座は、本年度で5回目となりました。シリーズで解説を進めてきましたが、今回初めて受講される方もいらっしゃいますので、改めて小島家のことや日記がまとめられた享和3年の出来事について、お話をしたいと思います。

はじめに小島家について概略を申し上げます。小島家は、方県郡小西郷村（今の岐阜市小西郷）において代々庄屋役を務め、当主は「当三郎」か「市左衛門」を名乗りました。

当館は、令和5年度及び同6年度に「小島眞可家文書目録」を二分冊で刊行しましたが、同家の文書は近世中期から近代（昭和期）にかけて総数8千点を超える大文書群であることが分かりました。今後の地域史研究に生かされるものと期待しております。

小島家の略系図



さて、テキストの日記を書いた人物は、小島家の第10代当主「市左衛門」です。同家の「回忌覚」によれば、市左衛門は文化7年（1810）行年43歳で亡くなっています。逆算すると明和5年（1768）に生まれたことになります。小島家の家督を、兄の市左衛門・光邦から引き継ぎましたが、自身に嗣子がなかったため、やがて弟の当三郎・光副へ譲ることになります。

小島家の当主は代々、村の出来事や村に回ってきた役所の触などを「公用日記」として書き留めました。これは村の記録であり、次代の者が参考にするとよいことを書き残したものであると言えます。

享和 3 年 (1803) は、小西郷村の領主が、幕府 (大垣藩預所支配) から陸奥国磐城平藩主・安藤家へ替わった年でした。いわゆる私領替えがあったのですが、市左衛門は、48 年ぶりの領主交替について、記録をとっておく必要があると考え、日記を残したのだと思います。

安藤家は元々美濃国の加納藩主でしたが、宝暦 5 年 (1755)、藩主信尹の不行跡が明るみとなり、信尹は幕府から籠居・謹慎を命じられました。さらに家督を次子信成に継がせ、石高を 6 万 5 千石から 5 万石へ減封、翌 6 年 5 月 21 日には加納から陸奥国磐城平への転封 (国替え) を命じられました。この時美濃国内にあった領地は、全て召し上げとなり、幕府領に組み込まれました。小西郷村 (村高 318 石余) もそのうちの一つであったわけです。

しかし享和 3 年の春、大垣藩預役所から「私領渡并分郷等ニ相成候而差支之有無、往古御料私領之訳」を書くように指示がありました。この動きから、領主の交替があるのではないかと風聞が立ち、村人たちが騒ぎ立てます。幕府領と私領 (大名領) では、年貢の取り立てに違いがあったからです。安藤家領であった頃、本途物成 (田畠や林野に課される本年貢) 以外に、雑税や御用金の徴収で苦しんだ経験があり、その辛い過去が蘇ったのかもしれません。この時、誰が領主となるのかまだ分からなかったのですが、12 月 5 日に初めて「安藤対馬守」と言い渡されます。安藤家にとっては旧領が復活する喜ばしいことでしたが、私領替えとなる村々には、深刻な問題として映ったものと推察されます。

市左衛門は、私領となる村々の名前を聞いて、日記に書き留めました。その総石高は 2 万 3047 石余となります。しかし、実際に安藤家に加増された領地は美濃国内の 1 万 8 千石余で、美濃郡代支配地 (幕府領) であった方県郡寺田村、小島村、一日市場村などは、この時対象外となりました (別表参照)。

2 安藤信成について

移封により磐城平藩主となった安藤信成は、藩政に尽力しました。中でも藩士子弟の教育に熱心で、藩校「施政堂」を創設し、漢学・四書五経・国語等のほか、兵学や洋学等を学ばせました。一方、幕政にあっては天明元年 (1781) に寺社奉行、天明 4 年 (1784) に若年寄、寛政 5 年 (1793) に老中というように出世し、要職を歴任しました。特に老中職は、寛政の改革を推進した松平定信の失脚後に拝命する、難しい局面で就任しましたが、結果的に文化 7 年 (1810) までの 17 年間、大過なく務め上げることになります。

このように、幕閣の一人として、幕政に貢献したことが認められて、信成の加増 (旧領の復活) が持ち上がったのではないかと考えます。享和 3 年 12 月、正式に私領替えの沙汰が、村々へ下されました。

さて次の史料は、但馬国出石藩主の仙石越前守へ送られた「老中連署奉書」と呼ばれるものです。折紙の様式になっています。この時の仙石越前守は、久道 (1774~1834) であると思われます。出石藩 (今の兵庫県豊岡市出石町) の第 5 代藩主です。八朔は、旧暦の 8 月 1 日にあたり、徳川家康がこの日に江戸城へ入ったことから、武士の祝日の一つになっていました。大名や旗本たちは、白帷子 (しろかたびら) を着て登城し、將軍家へ祝辞を申し述べる

行事がありました。久道は、將軍家（徳川家斉）へ太刀一腰・馬一疋を献上したのですが、この史料は、老中の安藤信成、太田資愛（遠江国掛川藩主）、戸田氏教（美濃国大垣藩主）、松平信明（三河国吉田藩主）が、久道の献上品を將軍家へ披露し、上様（將軍）が祝着であったことを伝えています。

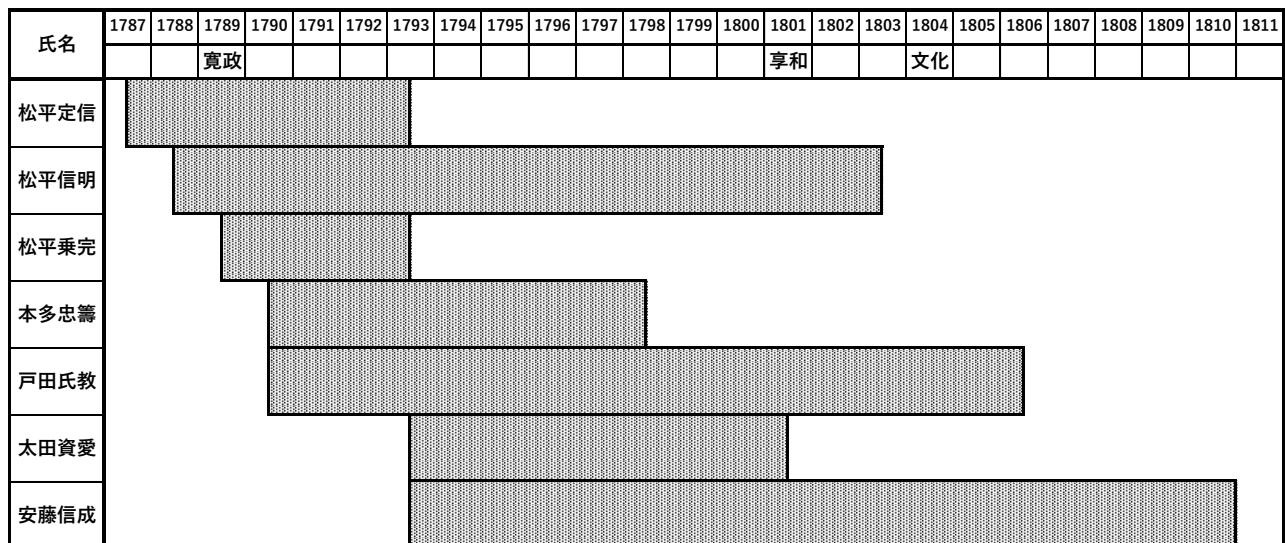


八月四日	信成	（花押）	為八朔之御祝儀 以使者御太刀一腰
太田備中守	資愛	（花押）	御馬一疋進上之候、 遂披露候処、一段之
戸田采女正	（花押）	（折紙）	仕合候、恐々謹言
松平伊豆守	氏教	（花押）	安藤対馬守
仙石越前守殿	信明	（花押）	
（読み下し）			
八朔の御祝儀として、使者を以て 御太刀一腰、御馬一疋之を進上 候、披露を遂げ候処、一段の仕合 に候、恐々謹言			

寛政期に老中であった人物の任期

氏名	読み	官名	補職年月日	免職年月日
松平定信	さだのぶ	越中守	天明7年6月19日 (1787年)	寛政5年7月23日 (1793年)
松平信明	のぶあき	伊豆守	天明8年4月4日 (1788年)	享和3年12月22日 (1803年)
松平乗完	のりさだ	和泉守	寛政元年4月11日 (1789年)	寛政5年8月15日 (1793年)
本多忠籌	ただかず	弾正大弼	寛政2年10月16日 (1790年)	寛政10年10月26日 (1798年)
戸田氏教	うじのり	采女正	寛政2年10月16日 (1790年)	文化3年4月26日 (1806年)
太田資愛	すけよし	備中守	寛政5年3月1日 (1793年)	享和元年6月7日 (1801年)
安藤信成	のぶなり	対馬守	寛政5年8月24日 (1793年)	文化7年5月24日 (1810年)

(『徳川幕府事典』4版 東京堂出版 2006年 参照)



4人が老中として揃うのは、寛政5年8月24日から享和元年6月7日までの期間となります。8月4日に文書を作成できる年となると、寛政6年（1794）から寛政12年（1800）までの6年に絞りこまれます。果たして、この老中連署奉書は、いつ作成されたのでしょうか。この点は明らかではありませんが、小西郷村が、安藤家私領になる前の出来事であったことは確かなようです。

享和3年に私領渡しになると噂された村と実際に安藤家領となった村

支配	享和3年に私領渡しになると 噂された村	安藤家領となった村と石高（石高は明治2年時点）					
		村名	石	斗	升	合	勺
大垣藩預所三十一年か村	方県郡	下西郷村	622	4	7		
		小西郷村	318	4	1	6	
		御望村	282		4	8	
		中村	344			4	
		西改田村	752	9		3	
		東改田村	604		9	5	
		上尻毛村	180	5	9	1	
		下尻毛村					
		上曾我屋村					
		又丸村					
		川部村					
石高合計							
			5,040石	3斗9升5合8勺			
大垣藩預所三十一年か村	厚見郡	野一色村	351	9	8	7	
		岩戸村					
		岩地村					
		前一色村					
		水海道村					
		日野新田					
		高田村					
		藏前村					
		切通村					
		北一色村					
		日野村					
石高合計							
			6,729石	3斗9升			
大垣藩預所三十一年か村	本巣郡	宗慶村	545	6	6	6	
		軽海村	916	5	6	7	
		十四条村	687	9	2	8	
		高屋村	1141	9	6	7	
		小柿村	927	2	1	6	
		柱本村	452	2	2	7	
		馬場村					
		石高合計					
			4,671石	1斗			

支配	享和3年に私領渡しになると 噂された村	安藤家領となった村と石高（石高は明治2年時点）					
		村名	石	斗	升	合	勺
笠松支配	方県郡	寺田村					
	方県郡	下曾我屋村					
	方県郡	小島村					
	方県郡	一日市場村					
	方県郡	鵜飼村					
	方県郡	黒野村					
	方県郡	木田村					
	羽栗郡	両印食村					
	石高合計						
石高合計							
			6,073石	9斗8升2合8勺			
笠松支配							

※ 石高は明治期岐阜県庁事務文書3・32・7の「美濃国元平藩領知郷村高帳」（明治2年2月）をもとにした。

※ 領主の異動は、角川書店発行の『角川 日本地名大辞典 21 岐阜県』を参考にした。